

編集後記

2月22日は猫の日です。2022年2月22日、私はあと200年生きる自信がないので、今年是最強の猫の日となります。今では我が家でも完全室内飼いで外に出すことはありませんが、先代までは出入り自由でした。隣の子が遊びに来て一緒におやつを食べたり、うちの子がお隣の庭で眠っていたり……。道端で猫を見なくなったのは交通量が増えたことと、ご近所トラブルを避けるためだと聞いています。みんなが寛容でなくなると、規則ができて不自由になるのは人間も同じだと思います。なんとなく息苦しい今だからこそ深呼吸をして、猫のようにのんびり、ゆったりと過ごしましょう。(N.S.)

コロナ渦もいよいよ3年目に突入で、皆様におかれましては如何お過ごしでしょうか？緊急事態やらマンボウのお陰で会食に行けないため、他機関研究者とのコミュニケーション不足が深刻です。しかし自分以上に心配なのが、学生のコミュニケーション不足です。一緒に過ごす時間が長い研究室の学生達でさえ、食事やお酒を共にできないため、どこか余所余所しさが未だに漂っております。最近の学生は（年寄り臭くて嫌なのですが・・・）タダでさえ、コミュニケーションが苦手と言われておりますが、コロナ渦のお陰でさらに悪化しております。大学に折角入学しても、部活動や食事会が皆無の1～3年生では、コミュニケーション不足がもっと深刻なのは？いったい数年後には、彼らどうになってしまうのだろう？と危惧しております。毎日の死者数のカウントも良いのですが、子供達の将来を見据えたもっと広い視点でコロナ渦を考えるべきではないでしょうか？(E.T.)

今期から大学紀要編集委員会の委員をさせて頂きました。鈴木委員長の指導の元、慣れない作業に対してこれで良いのか、戸惑いながら作業をおこないました。特に、自分の専門外の投稿論文のチェックをすることに抵抗はありましたが、新鮮さも感じました。

また、今回学生の論文も担当させて頂きましたが、私が病院薬剤師時代、見よう見まねで論文を作成し、初めて学術雑誌に掲載された「感激」を思い出しました。それと、以前病院薬剤師さんの論文作成のお手伝いをした時、出来上がった論文を手にし、「今年一番の嬉しい出来事でした。」と言ってもらったことを思い出しました。

学生が自分の掲載された論文を見て、どう感じるのかと思い巡らせています。今後、自分の論文が学術雑誌に掲載される感動や喜びを、より多くの学生に経験させてやりたいなと思いました。(K.C.)

今年も「いのちの教育」のコーディネーターとして学生のレポートを読む機会があった。小澤竹俊先生はめぐみ在宅クリニックの院長、エンドオブライフ・ケア協会の代表として看取りの現場における対人援助からの学びを、そのまま「折れない心を育てるいのちの授業」として、学校、地域、企業などで紹介されてきた。薬学部では唯一本学が貴重な経験を共有している。学生の反応はストレートで、「今まで病気を治す過程や治

るまでなど『病氣』と向き合う授業はあっても、死まで考える『いのち』の授業を今日の授業のように詳しく受けたことがなかったので、とても勉強になりました。」「『いのちの授業』を聞いて、医療従事者に求められること、医療従事者ができることは、医療機器や医薬品を用いて病気を治療するだけでなく、心に寄り添うということも含まれているということを学んだ。」「苦しむ人の力になりたいと思う時一番大切なのは自分もまた支えられている人間なのだということを理解することだと最後に心得た。小澤先生の深い優しさが伝わったと共に、私も人に優しくあろうと改めて思えた講義だった。」医学・看護・薬学の共通コアカリ検討も時宜に適った試みか！？ (M.H.)

毎年のことながら、自分の専門分野と異なる論文を拝読させていただくたびに、本当にみなさんのためにきちんとした論文校正のお力添えができているのかといつも不安になります。去年は確か化学系の論文に四苦八苦したのを覚えております。1年経つのが本当に早いと感じる今日この頃であります。今回の論文からもみなさんの研究や仕事に対する熱意やひたむきさを感じ取ることができました。私自身も自己研鑽を怠ることなく先生がたの後ろ姿を見ながら頑張っただけでゆきたいと思えます。つい先日のことですが、コロナの影響で薬学会がオンラインとなりました。私としても色々な先生や友人と会えることを楽しみにしておりましたが本当に残念です。我々の紀要委員会もコロナに負けないように、研究成果の発表の場を通して少しでも人と人を繋ぐ架け橋でありたいものです。明るい未来と日常が戻ることを信じてみんなで頑張っただけでゆきましょう。(Y.M.)

開発のための森林伐採等により、未知のウイルスと人とが接触する機会が増えたことが現在のパンデミックの一因である、という有力な説があります。もしもこれが正しいとすると、今後第二第三のパンデミックが発生しても不思議ではありません。こうした惨禍を回避するための一つの方法は開発をやめることですが、剰余価値を生み出すことを至上命令とする資本主義が続くかぎり、開発をやめることは不可能でしょう。模索すべきなのは「新しい資本主義」ではなく、資本主義のオルタナティブなのかもしれません。本号では「原著論文」3本と「総説」1本を掲載することができました。ご投稿くださった皆様に厚く御礼申し上げます。(H.S.)